NTS物語

❸ ビジネスモデルの確立へ向けて（第18回）

編集企画体制への道（2）

～出版事業①本とボクシング～

代表取締役　吉田　隆

●スポーツとの縁

このところ、NTSではランニングやバスケットボールなど、スポーツ活動が盛んである。個人で水泳やバトミントンなどを楽しんでいる人も多い。私も、科学技術情報事業部の○○リーダー率いるランニングチームの一員として、時折、駅伝大会に参加している。私とスポーツとのつき合いは、中学で始めた陸上競技以来、既に40年を数える。

実は、出版業界に入ったのも、社会人になってから取組んだ、ボクシングがきっかけだった。今回は、そのスポーツとの縁について、仕事との係わりも交えながら述べることにする。

●出版社との縁

小学生の頃、私は出版社に入りたいと、ぼんやりと考えていたことがある。しかし、その後はそんなことはすっかり忘れて、高校は理数系を選び、昭和44年4月、創立2年目の九州芸術工科大学に入学した。卒業と同時にT電機に入社したが、仕事との係わりの中で興味を持った技術翻訳の世界に転身を図るべく退職した。翻訳業をめざしてまず選んだ仕事は、新聞配達のアルバイトだった。人形町の日経新聞芳町専売所に1年半ほど身を置いた。新聞配達を選んだ理由は、勉強の時間とスポーツの時間が比較的自由にとれるためだった。当時、私はボクシングに熱中していた。走るために始めたのだが、思いもよらずはまってしまった。アルバイト期間中は、午前4時起床で、～6時早朝トレーニング、～8時朝刊配達、～午後2時自学、～4時夕刊配達、～6時学校、～9時ジム、～11時自学というスケジュールの生活を毎日続けた。新聞の求人欄でフジテクの名を見つけたのはそんな時だった。面接時に小野社長に何をしているのかと尋ねられ、新聞配達だと答えると、わずかにうなずいたようだった。後日、直属の上司となった○○常務が教えてくれた。「あの時、応募者多数だったが、小野社長はこいつがいいといって決めた。社長は一時期、新聞配達で家計を支えていたので、吉田君とは、いわば新聞が取り持つ縁だよ。」人生、何が縁となるか分からない。

ボクシングは入社後も続けた。試合の翌日、片目に大きなクマを作ってセミナーの講師依頼に出かけたことがあった。応対に出た東芝の半導体事業部の幹部氏は、しげしげと私の顔を見つめて「どうしたの?」と尋ねた。わけを話すと、「それで勝ったの?」と聞く。「KOで勝ちました!」と答えると、「それはよかった!」と相好を崩し、その後は話がはずんだというようなことがよくあった。

●ナチュラル・タイミング～想像力の話～

私は、ボクシングは格闘技ではなく知能技だと思っている。一つのエピソードがある。終戦後、白井義男という天才ボクサーが日本人初の世界チャンピオンとなり、日本中に熱狂の渦を巻き起こした。GHQのアルビン・カーン博士は、この白井義男が持つ不思議な才能を認め、ナチュラル・タイミングと名付けた。それは「相手との距離を測定し、寸分の狂いもなく行動に移せる能力」を指し、世界でも超一流のボクサーだけが備える素質であるそうだ。

はじめてこの言葉に出会った時、私はセミナーに似ているなと思った。セミナーに限らず、本の編集者にとってもタイミングは命である。だが、タイミングだけでは身体能力の説明にはなっても、不思議な才能は説明できない。カーン博士の言葉を補足するなら、「彼は想像力を駆使して試合の結果を予測し、それを現実に再現した」ということになる。観客にしてみれば、予期しない結果が違和感もなくナチュラルに実現するため、そのギャップに不思議さと魅力を覚えるのだ。だが、凡人にしてみれば、試合結果の予測など教科書の世界の話であり、全体ではなく部分の予測の積み重ねで、少しずつ試合を組み立てるほかない。

出版企画の理念にも、想像力を駆使して科学技術や社会のニーズを予測し、間髪を入れず行動に移すという点で、ボクシングに合い通じるものがある。

●BOX!～さあ闘え!～

昭和60年7月の会社設立をきっかけに、26才から10年間続けたボクシングに終止符を打った。

所属したアベ・ボクシングジム会長の阿部幸四郎氏は、自らスパーリングのゴングを打つと必ず、「BOX!」と鋭く気合を入れた。それは「さあ闘え!」を意味した。緊迫した場面になると、再び「BOX!」の声が飛ぶ。それはしばしば、「リスクを恐れず相手の距離に入れ!」を意味した。気持ちと技術の両立が必要な、言うは易く行うは難き世界である。

出版事業は出版が半分、事業が半分である。せっかく本やセミナーを企画しても、リスクを負う勇気がなければ世に出ない。しかし、失敗したら大変だぞ!と小野社長に中止勧告を受けた、創業直後の「二軸シンポ」や、資金繰りの厳しい時期に、取引銀行から「社長の道楽だ」と揶揄されながらも発刊にこぎつけた大作「現代おさかな事典」は、決して一か八かの賭けだったわけではない。企画を信じた結果なのである。

私にとってボクシングとは、厳しい時、苦しい時に、自分が自分であるための気持ちの下支えとなってくれるものだった。情熱的なボクシングの伝道師であり、私にとって人生の師の1人とも言えた阿部幸四郎会長は、昭和63年に故人となった。私はその後、40才を過ぎてから他のジムに1年ほど通ってみたが、多忙で続けられなかった。もう、ボクシングは無理だろう。

これからは、先日70才を超えてフルマラソンに初挑戦し、見事完走した○○リーダーに倣って、できるだけ早い時期にフルマラソンに挑戦したいと思っている。

◉今月の人事

【入社】

【異動】

【退社】

NTSニュース
2003年5月号（通巻51号）
2003年4月25日発行